

窓を

俺は小さな窓の家を出る
そしてきゅうくつな路地を歩く
そして無理矢理きゅうぎゅうのバスに乗り
喘ぎ喘ぎ降りる

俺が喘ぐのは
すし詰めのせいじゃなく
誰もが無縁だからだ

そして俺は同様な電車に揺られ
降りればすぐと地下道が待っている
小さな窓の暗い仕事場が待っている

ああ、
日の光は何処だ
見晴らしが欲しい

せめて全てが
ああ、全てがガラスの如く
透明だったなら

ガラスの家
ガラスのバス
ガラスの電車
ガラスの部屋・・・

ああ、
広さは何処へ行った
これでは俺らの街は
地下のカタコンブも同然だ
地面は何処だ
出口は何処だ

(1982.4.11)